

勝林寺寺報

お盆に思う

もうすぐお盆がやつてきます。お盆になると、それでお寺では仏事が當まれ、法座がひらかれます。またそれぞれの家でも仏壇を飾り、お墓参りをいたします。それは日本伝統のゆかしい行事でもあります。

このお盆とは、正しくは盂蘭盆といつて、インドの古代語のウツランバナという言葉から來たといわれ、お釈迦様の弟子であつた目連が、苦しむ母を救つたという説話がとかれる。「盂蘭盆經」にもとづいて生まれたといわれています。中国ではおよそ千五百年の昔に始まり、日本でも推古天皇のとき、今から千四百年前に始まりました。この長い歴史を重ねてきたお盆の行事は、いまでは多くの日本人の心の奥深くに沈殿していることです。

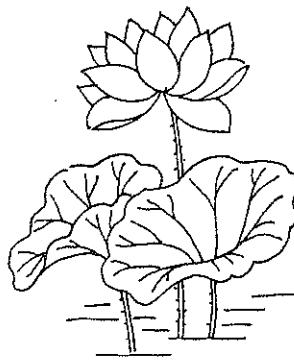
お盆とは、死んだ人をしのぶ日であります。一年のうちには、老人の日があり、父の日、母の日があり、また子どもの日がありますが、それに並べて言えば、お盆とは、死者の日、先祖の日といつてもよいと思います。

ところで、その死んだ先祖たちは「いまどき」にいるのでしょうか。そういうわたしたちもやがては死んでいかなければなりませんが、人は死んでどこへ行くのでしょうか。あなた自身は、人間の死後についてどう考えていますか。死んだらペーであとはのこらないと思っていますか。それとも、死んでも何かが残ると考えますか。仏教では、はじめのような考え方を無の見方、

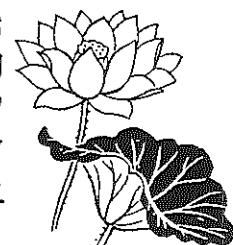
あなたの考え方を有の見方といつて、いずれも誤りであると、説きます。そしてそういう有と無い考え方を超えて、まことに死を生きていく道を教えるわけであります。

あなたも、このお盆を迎えるにあたって、あらためて自分自身の生と死について、いささかお考えになつてはどうでしょうか。

(信楽峻磨遺構法語集より引用)



ご案内



全戦没者追悼法要をお勤めします

戦後七十一年が経ちました。戦争を経験された方が、年々少くなり、その記憶も次第に薄れつつあります。しかし、決して忘れてはならないのです。皆で、戦没者の方々に思いをはせながら、その決意を新たにいたしましょう。

日時
八月八日（月）受付 午後一時三〇分より
法要 午後二時より

内容 表白、戦没者呼名、お勤め（正信偈）、法話

一九日（金）勝林寺 子ども会

二三日（火）地蔵盆

二六日（水）みのりを聞く会

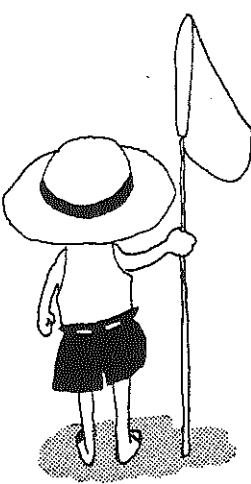
二八日（日）北恒大震災九〇年
メモリアル合同訓練

仏婦子ども研修会

「お寺のことは、お父さんお母さんまがせでよくわからない」と言われる、若いお母さん（若くなくてもいいですけど（笑））と子どもたちが一緒にになって、お寺のことを学び、作法やお勤めの練習をします。もちろん、それだけでなく、楽しい企画もいっぱいです。ぜひ、お友達を誘つて、お寺に来てください。

日時
八月一九日（金）受付 午前九時三〇分より
開会 午前九時四十五分より
閉会 午後五時ごろ

内容 学習（作法など）ゲーム、流しそうめん、工作、美術鑑賞、川遊びなど



八月 勝林寺 予定

二日（火）中川 信宅 一三・二三回忌
兼井隆雄宅 一三回忌

五日（金）宮古智慧子 納骨 初盆
中山雅博宅 三回忌

七日（日）勝林寺 戦没者追悼法要

八日（月）出石A 盆

一日（木）出石B 盆
西本 初盆

二日（金）出石C 盆

三日（土）田中歳康宅 初盆

五日（日）生田克巳宅 三回忌

九日（金）勝林寺 子ども会

十三日（火）地蔵盆

二六日（水）みのりを聞く会

二八日（日）北恒大震災九〇年
メモリアル合同訓練

（敬称略）

江戸幕藩時代の念仏衆

蘇教（キリスト教）の侵入を恐れた江戸幕府大名は、まず、「人別帳（戸籍）」を作り、民衆にいくつかの階級を作った。大まかには「士農工商エタヒニン」という。古く律令時代以来の差別支配構造である。そのうえにかぶせて、今までは、職業ごとに人別差別を付け加えている。たとえば「農」。一番多い職業だ。庄屋（名士）、本百姓・高持百姓・小百姓そして、小作・水呑百姓・・こんな具合である。それらにいわゆる五人組を組ませ、動きのきかないように互いを縛り上げる。こうした呪縛の中で、農民をその土地に固定化したのである。その農民をさらにまた「寺請け制（檀家制）」という特定寺院への登録制にし、二重にも三重にも固定化し、奴隸化したのである。そんな中だからこそ、百姓のおかあ（女房）は、子どもをおんぶしながら、野に出て、河に入つて、山に分け入つて稼がねばならなかつた。みんなで競いながら生き生きと生きた。そして村の「道場さん」に集まつて、女中講（尼講）で、お正信偈、御文書などをあげて語り合つた。そのときこそ、日々の厳しい暮らしからわざかな時間でも離れられる至福の時であった。蓮如さまは、その語録の中で次のように言つておられます。「同じ仏教であつても、他流には名号より絵像。絵像より木像といえり。わが宗にては、木像よりも絵像、絵像よりも名号という」と言つて盛んに、六字のお名号を書いて、人々に与えられた。「わたしほど多く、名号を書いた人間はいないだろう」とのちにおつしやつた。なぜそれほど名号は大切なのか。「南無阿弥陀仏」それは、親鸞聖人によれば「大悲召喚の勅命」、如来さまの直接の「呼び声」であり、「来いよ、必ず救う」との親心いっぱいの呼

び声なのだからであると、親鸞聖人は、「本典総序に喝破している。「南無」というは帰命。これまた発願回向の義なり」という。目の見えない愚かな私に「ここに親が、十劫の昔から願つて呼んで待つて居るよ」と叫んでいて下さる。それが南無阿弥陀仏のお名号である。名号さえあれば、恐れるものは何もない。

織田信長は、入京を果たすや、天下に「天下に「天下布武」を号令し、全く一方的に堀商人からは冥加金を取り、奈良・京都の諸寺を焼き払い、横暴無人の限りを尽くした。その前に立ちはだかつたのが、金も武力も持たない「念仏衆」。石山本願寺に立てこもり、熊野水軍などの支援を受けながら「南無阿弥陀仏」のむしろ旗のもと、秀吉の世に至るまで、抵抗を続けた。その間二十年にもわたるという。世にいう「石山合戦」である。秀吉のする賢い戦略。京都中央部に東西本願寺、それぞれに土地を与え、分散安定策で終止符を打つた。武家社会の重圧の中で、繰り広げた名もない人々の念仏の力であった。

（文責 前住職）

「正信念仏偈（正信偈）」においては墨鸞草の「惑染の凡夫、信心發すれば生死即涅槃なりと証知せしむ」（真宗聖典二〇六頁）という偈文の和訳になります。「惑染の凡夫」とは、惑も染も煩惱のことであり、煩惱に生活全体が染め抜かれている私たち凡夫のことです。煩惱を離れず嫌わざして涅槃（浄土のさとり）を得ることは信心に因ることを明らかにされています。

さて、「修の意識（賢善精進、向上心）」は、今まではまだ、努力が足りない、と今の自分を否定することから始まり、将来に成果を期待します。それだけに、頑張つて困難を克服してきました。しかし、人に押しつけては嫌悪され、そしてますます自分の経験の確かさや歩みに執着していきます。（中略）

本願に遇い、如来の大悲心に目覚めるといふことは、つまり、「どうにもならない凡夫に、どうする必要もない」身の領きが開かれるといふことです。「修の意識」によつて自他を差別して、出遇つた教えの言葉でさえも利用して、人間に向けてレッテルをはり、序列化していく道具にしてまで自己を立てようとする生活の相が深く悲しまれ、善し悪しに執着して差別せずにほんの少し痛ましき愚かな相を知らせたもう如來の悲しみによつて、人間であることの悲しみにまで帰されて、時代社会を超えて時代社会と共に在り、「来いよ、必ず救う」との親心いっぱいの呼



法語カレンダー八月 (HPより一部抜粋)
生きる身にも 信あらば
生死のまことに 涅槃あり

どすん

先月号のこのコーナーで、中庭で飼っている金魚を紹介しました。記事を読んで、早速、何人かの方が見にきてくださいましたよ。ほかにも、

我が家には、めだかや猫の「ふじ」などたくさんのお魚がいます。そして、このたび、さらに「鳥骨鷄（うづけい）」が仲間入りしました。住職の子どものころからの夢の実現なのだそうです（笑）。住職がまだ小さくて、ひたすらお兄ちゃんの後を追いかけているころ、少し年上の人たちの間で「鳥を飼う」のがはやつたそうです。鳥自慢を聞きながら「いつか、自分も鳥を飼う！」と心に決めて五十年余、その話を聞いた門徒の方たちの計らいで、ついに夢が実現しました。私は「鳥か・・・と、どちらかというと積極的に賛成ではなかったのですが、いざ飼つてみるとこれがけつこうかわいい！卵が値打ち品らしい！」（笑）。家族の一員として認める」となりました。

長年の夢を実現させた住職が、ちょっとと勝ち誇つたように私に聞きます。「夢はなに？」――私の答えは「毎日、こつこつと庭の草取りをするおばあちゃんになること」――勝林寺に嫁いで三十年が経ちました。たくさんの方と家族同様にお付き合いさせていただく寺での暮らしにも少しずつ慣れてきました。多くの方々の生きることはもちろん、老いること、病むこと、死ぬことを身近に感じる中で、どう年を重ねるかがけつこう気になりはじめています。よいお話を何十回聞かせていただきても、煩惱（自己中心の考え方、自己愛）にまみれている私が、ほんのわずかでも仏さまの望まれる姿に近づけたら、年をとつたとき、多くを語らずに、こつこつと境内の草取りに励む人に成長しているのではないかと思えるのです。幸い、私の周りにはたくさんのお手本がいらっしゃいます。「私の夢の実現」に向けて一歩ずつ進みます。（文責 坊守）